

若手研究会の開催とその効果について

石光俊介*, 浦上美佐子**, 川原秀夫***, 藤井雅之*,
岡村健史郎**, 新谷浩一****, 岡野内悟*

The Crossing Society Established by Younger Members of Our Faculty and its Effectiveness.

Shunsuke ISHIMITSU, Misako URAKAMI, Hideo KAWAHARA, Masayuki FUJII,
Kenshiro OKAMURA, Koichi SHINTANI and Satoru OKANOUCHI

Abstract

A workshop has been established by young members of our faculty. Its purpose is to provide a forum for the opportunity of staff to freely brainstorm and discuss ideas for improving lectures as well as extracurricular activities under the direction of our technical college's vertical organizational structure. Our first concern was not to reproach those involved and the system that maintains the institution, but to consider a method for coping with institutional problems by committee members. Every effort has been made to reach constructive and practical solutions. We are confident that the result has been a positive advancement for research and education as well as improved working conditions at our institution. In this paper we refer to the outcomes, influences on the institution, and the activity of the work environment, as developed through the establishment of this workshop.

Key words: Younger members of the faculty, Brainstorm, Lecture, Extracurricular activity, Research

1 緒言

現在、義務教育における生徒たちは国際的に見て成績は上位にあるものの、(1)判断力や表現力が十分に身に付いていないこと、(2)学習意欲が必ずしも高くないこと、(3)学校の授業以外の勉強以外の勉強時間が少ないなど、学習習慣が十分身に付いていないことなどの点で課題が指摘されている。さらに、数学や理科が好きであるとか、将来これらに関する職業に就きたいと思う者の割合や、学校外の勉強時間が国際的に見て最低レベルであるなどの問題がある⁽¹⁾。このような資質をもつ学生を技術者として育てるためには、その学生を多面的に評価し、良い面を伸ばすような教育を行う必要もある。特に高専ではそのような特色ある教育が可能な場でもある。

しかし、本校は一般科目、商船学科、電子機械工学科、情報工学科と教員ごとに縦割り組織になっており、他学科のことは他校の如くに情報が入らず、特にクラブ指導などを通じてしか、学生の多面的な面を判断することができなかった。

そこで、助教授以下の若手教員（自分で若手と思っている人も含む）が日々の授業における実践や新たな試み、改良点等について発表し、議論できる場を作るために、1998年に学科の壁を越えた横断的研究会を設立した。これは従来のワーキンググループのような仕事としての研究会ではなく、若手教員の自発的な交流会としての意味合いが強い。この研究会においては、まず、若手教員のレベルでできることについて、問題点・疑問点を話し合い、それを集約し共通認識を持つことにより、今後の物事に処することができることも考えたこと